

副詞のL1獲得と機能範疇について

水 野 江 依 子

A number of recent articles have proposed that adverbs are licensed by a functional head with which it is semantically associated in a certain syntactic relation. The aim of this paper is to consider what kinds of functional heads license adverbs within the framework of the minimalist program proposed by Chomsky (1995, 2001). It is proposed in this paper that functional categories are divided into two types: one is core functional categories such as C and I and the other is peripheral functional categories such as Mod and Mood. This paper points out problems with analyses based on core functional categories and claims that adverbs should be licensed by peripheral functional heads. In addition to synchronic data, some adverbial data of L1 acquisition are presented to support our claim.

1. Introduction

よく知られているように、副詞の生起する位置は比較的自由であるが、全く自由であるわけではない。例えば、*probably*などの認識様態副詞は、(1a-c)で示したように文頭、助動詞の前、助動詞の間に生起することはできるが、(1d-e)のように、動詞句の前後に生起することはできない。

- (1) a. *Probably* George will have read the book.
- b. George *probably* will have read the book.
- c. George will *probably* have read the book.
- d. George will have *probably* read the book.
- e. George will have read the book *probably*.¹

また、(2a) に示したように意味クラスの異なる副詞は共起可能だが、(2b)に

示したように同じ意味クラスの副詞がひとつの文に複数生起することはできない。

- (2) a. Probably_(epistemic) John cleverly_(subject-oriented)
frequently_(frequency) avoided Mary carefully_(manner).
(Alexiadou (1997:9))
b. *Evidently_(epistemic) John will probably_(epistemic) left.

また、副詞には厳密な語順関係があり、(3)で示したように、認識様態副詞は主語指向副詞の前に生起することはできるが、逆は非文となる。

- (3) a. Probably_(epistemic) John carelessly_(subject-oriented)
has missed the last train.
b. *Carelessly_(subject-oriented) John probably_(epistemic)
has missed the last train.

このような副詞の振る舞いに対して、多くの研究は認可の観点から説明を試みている。

- (4) An adverb is licensed by a functional head with which it
is semantically associated in a certain syntactic relation.

すなわち、副詞はその意味が関連する機能範疇主要部によって、ある統語関係のもと認可されるというものであるが、近年の研究は、認可子および認可子と副詞の統語関係がどのようなものかということで大きく二つのタイプに分かれる。

一つは、Svenonius (2002), Costa (2004) などによって提案されているタイプのもので、その提案においては、副詞は認可子C, I (=T), Vに付加するものとされている。² もうひとつは、Cinque (1999) に代表されるもので、副詞は指定部位置に生成され、その認可子は意味素性を反映した機能範疇 Modal, Mood などである。

本論では、CとI (=T) のような従来から提案されてきた機能範疇を文の核となる機能範疇という意味で核機能範疇 (core functional head) と呼び、Mod, Mood のような機能範疇を周辺的機能範疇 (peripheral functional head) と呼ぶことにする。

- (5) *core functional heads*: C, T (Chomsky (2001))
peripheral functional heads: Mod_{epistemic}, Mod_{root}, Mood
(Cinque (1999))

そして、核機能範疇が認可子となる分析をCore FC (functional category) Analysis、周辺の機能範疇が認可子となる分析をPeripheral FC Analysis と呼ぶ。

(6)

		Core FC Analysis	Peripheral FC Analysis
統語関係		adjunction	spec-head
認可子	subject-oriented adverbs (e.g. <i>carelessly</i>)	I (=T)	Mod _{root}
	epistemic adverbs (e.g. <i>probably</i>)	I (=T)	Mod _{epistemic}
	speech-act adverbs (e.g. <i>frankly</i>)	C	Mood

Core FC AnalysisとPeripheral FC Analysisの分析の是非については、これまで様々な立場から議論がなされてきた。本論の目的は、これまでの議論に加え新たに第一言語(L1)獲得という観点から、Peripheral FC Analysisが妥当であるということを示すことである。

本論の構成は次のとおりである。2節ではCore FC Analysisを概観し、共時的観点からその問題点を指摘する。3節ではPeripheral FC Analysisについて言及し、共時的観点からその妥当性について論じる。4節では、L1獲得の議論の前提となる子供の文構造について考察する。5節ではフランス語の副詞のL1獲得を概観し、Peripheral FC Analysisの妥当性について考察する。6節は結語およびこの論文の理論的含意を述べる。

2. Core FC Analysis

(1)-(3)の副詞の振る舞いに対するCore FC Analysisの分析をみていこう(cf. Svenonius (2002), Costa (2004))。この分析のもとでは、(1)は(7)の構造をとる。

- (7)
- a. [_{IP} probably [_{IP} George will have read the book]]
 - b. [_{IP} George [_I probably [_I will [_{vP} have read the book]]]]
 - c. [_{IP} George [_I will [_{vP} probably [_{vP} have read the book]]]]
 - d. *[[_{IP} George [_I will [_{vP} have probably read the book]]]]
 - e. *[[_{IP} George [_I will [_{vP} have read the book probably]]]]

(7a-b)において、*probably*は認可子Iあるいはその最大投射IPに付加しているため、正しく認可され容認可能となる。一方、(7d-e)は意味的に関連する認可子Iに付加されていないので非文となる。問題は(7c)である。これは、正しい認可子Iに付加されていないのにも関わらず、容認可能である。Costa (2004)はこのような問題に対し、副詞の様々な位置は、VP移動、スクランプリング、V移動などの他の統語操作によって生じてくるものであると主張している。この主張のもとでは、(7c)は(8)で示したように副詞はIに付加され正しく認可され、*will*が移動していると考えられる。

(8) [IP George [_I probably [_I will [_{VP} have read the book]]]]

しかしながら、この分析には問題がある。まず、助動詞 *will* の移動する先である。(8)において可能な移動先の一つは、I' のさらなる付加位置である。

(9) [IP George [_I will_i [_I probably [_I t_j [_{VP} have read the book]]]]]

しかしこの場合、なぜ *will* が I の付加位置から、同じ I の付加位置へ移動しなければならないのか説明できない。ミニマリスト理論の元では、経済性の観点から、不要な移動はしてはならない。また、このような移動が可能であるならば、(7d)においても *probably* が I に付加され、その後 *will, have* が V 移動したと考えれば、誤って容認可能としてしまう。

(7c)を派生する二つ目の可能性としては、*George*がCP指定辞の位置へ移動し、*will*がCの主要部へ移動するというものだ。

(10) [CP George_j [_C will_i [_{IP} t_j [_I probably [_I t_i [_{VP} have read the book]]]]]]]

しかしながら、この分析も主語がCP指定辞へ移動する妥当な駆動要因が存在しない。よって、Costa (2004)の分析には問題がある。

副詞の認可子を核機能範疇に限定する考えにはさらなる問題がある。この分析のもとでは(6)で示したように、認識様態副詞のみでなく、*carefully*などの主語指向副詞の認可子もIである。その場合、もし一つの主要部が一つの副詞のみ認可すると仮定するならば、(2a)で示した主語指向副詞と共起できる事実を説明できない。また、Travis (1988)の言うように一つの主要部Iが二つの素性を持っており、それぞれの素性が副詞を認可すると仮定したとすると、今度は(3)で示した認識様態副詞と主語指向副詞の厳密な語順関係を説明することができない。従って、副詞の認可子は核機能範疇であるという

Core FC Analysis には問題があるように思われる。³

3. Peripheral FC Analysis

Cinque (1999) は、(6) で示したように、意味素性を反映させた周辺の機能範疇主要部によって副詞は認可されると提案した。そして (11) で示したように、より複雑な節構造を仮定した。

- (11) [Mood Mood... [Mod Mod_{epistemic} [TP T ... [Mod Mod_{root} ...
(cf. Cinque (1999:106))

この提案は 2 節で指摘した Core FC Analysis の問題点を解決することができる。すなわち、この提案のもとでは、Mod_{epistemic} は一つの認識様態副詞しか認可できないので、(2b) で示したように複数の認識様態副詞が共起しない。また、主語指向副詞は別の機能範疇 Mod_{root} で認可されるため、(2a) で示したように共起可能である。さらに、(3) で示したように両者に厳密な語順関係があるのは、それぞれの認可子に厳密な順番があるため、語順が違えば正しい認可子に認可されないためである。

- (12) a. [Mod probably Mod_{epistemic} [TP John T [Mod carelessly
Mod_{root}... [VP V...
b. *[Mod carelessly Mod_{epistemic} [TP John T [Mod probably
Mod_{root}... [VP V...

副詞の分布に関して、Cinque (1999) の分析には問題があるのではないかと指摘する人がいるかもしれない。(13a-b) についてみてみよう。

- (13) a. [Mod probably Mod_{epistemic} [TP George will [VP have
read the book]]] (=1a)
b. [Mod Mod_{epistemic} [TP George will [VP probably have
read the book]]] (=1c)

Cinque の分析では、(13a) では、*probably* が適切な認可子の指定辞位置にあるため正しく認可され容認可能となる。しかし、(13b) においては、副詞は Mod_{epistemic} の指定辞位置になく、誤って非文であると判断されてしまう。

そこで本節では、副詞の認可のメカニズムについて Chomsky (2001) のミニマリスト理論の枠組みに基づいて修正を行う。副詞の認可について、Cinque (1999) は指定辞-主要部関係のもとでの認可を提案してきたが、一般

的な素性照合は Chomsky (2001) 以降、(14) で示したように、Agree のもとで行われる。

- (14) A relation Agree holds between α and β , where α has interpretable inflectional features and β has uninterpretable ones, which delete under Agree. (Chomsky (2001:3))

Cinque の提案した指定辞位置というのは、素性照合が行われるための可能性の一つである。そこで、本論文では、副詞の認可は Agree のもとで行われると提案する。

- (15) Adverb Licensing (Proposal 2)
An adverb is licensed by a functional head which it is semantically associated with under Agree.

この提案のもと、認識様態副詞の分布について具体的に見てみよう。

- (16) a. [_{Mod} probably Mod_{epistemic} [_{TP} George will [_{vP} have read the book]]]

 b. [_{Mod} Mod_{epistemic} [_{TP} George probably will [_{vP} have read the book]]]

 c. [_{Mod} Mod_{epistemic} [_{TP} George will [_{vP} probably [_{vP} have read the book]]]]

 d. * [_{Mod} Mod_{epistemic} [_{TP} George will [_{vP} have probably read the book]]]

(16a) では、認識様態副詞は認可子 Mod_{epistemic} の指定辞位置に併合 (Merge) され、その位置で素性照合され、認可される。(16b) では副詞は T' に併合され、この位置で認可子 Mod_{epistemic} と Agree のもとで素性照合が行われ正しく認可される。(16c) は vP の付加位置に併合され、Agree のもとで素性照合される。(16d-e) が非文であるのは、副詞が vP 内に生成されているためである。Chomsky (2001) は、(17)-(18) に示したように、vP はフェイズ (phase) を形成し、フェイズの中にある要素は上位の計算体系には関与できないと主張している。

- (17) phase: CP, vP

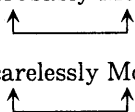
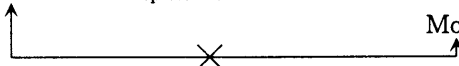
- (18) Phase-Impenetrability Condition

For strong phase HP with head H, the domain of H is not accessible to operation outside HP; only H and its edge are accessible to such operations, the edge being the residue outside of H', either specifiers or elements adjoined to HP.

(Chomsky (2001:13))

従って、(16d-e) では副詞の素性照合が正しくなされないため、派生が破綻してしまい非文となる。(16c) は、副詞が *vP* の付加位置に生起しており、(18) の定義により接近可能 (accessible) なので、Mod_{epistemic} と素性照合が可能となるのである。

(12) の語順に関する分析も (19) のように分析しなおすことができる。

- (19) a. [Mod probably Mod_{epistemic} [TP John T

 [Mod carelessly Mod_{root} ...
 b. *[Mod carelessly Mod_{epistemic} [TP John T [Mod probably
 Mod_{root}...

(19a) では、それぞれの副詞が適切な認可子と Agree の関係のもと、認可されるため容認可能となる。一方、(18b) が非文となるのは、素性照合がもっとも近い認可子と行われるため、*carelessly* が *probably* を超えて、Mod_{root} と素性照合されず、派生が破綻するためである。

以上のように、副詞の認可子は核機能範疇ではなく周辺の機能範疇であると仮定することによって、副詞の統語的振る舞いをミニマリスト理論の枠組みの中で自然な帰結として説明できる。

4. L1 Acquisition and Clause Structures

Peripheral FC Analysis の妥当性を L1 獲得の観点から論じる前に、子供の節構造 (clause structures) について考察しておく必要がある。子供の節構造については多くの研究によって言及されているが、大きく分けて二つの立場に分かれている。一つは、Radford (1990) に代表されるように、子供の節

構造は語彙範疇からだけ成っており、CP, IP, DP のような機能範疇は含まれていない、というものだ。この考えのもとでは、子供から大人の文法へ移行する際に、機能範疇を新たに獲得していくということになる。もうひとつの立場は、Poeppl and Wexler (1993) が主張するように、子供も大人と同様にCP, IP を持っているというものである。本節ではまず Radford (1990) の主張について考察していく。

4.1. Absence of CP and IP in Early Child's Structures

Radford (1990) は、英語における子供の発話を観察した上で、子供には大人と同じ節構造は備わっていないという主張をしている。⁶ 具体的には、子供の節構造は語彙範疇からのみ成っており、機能範疇主要部 (CP, IP, DP) を欠いているというものである。

CP がいないことを示す証拠としていくつか子供の発話の特徴を挙げているが、本節ではそのうちの3つの論拠を概観する。第一に、子供の発話する疑問文には助動詞が全く存在しない。

- (20) a. Fraser water? Mommy egnog? See hole? Have some?
Sit chair?
b. Chair go? Kitty go? Car go? This go? That go? Jane
go home? Mommy gone? (Claire 24-5)⁷

(Radford (1990:122))

大人が発話する疑問文には助動詞が存在し、(21) で示したようにCへ移動している。

- (21) a. Has Mommy gone home?
b. [CP [C has_i] [IP Mommy [I t_i] [VP gone]]]

Radford (1990) は、子供の疑問文に助動詞が存在しないということは、主語-助動詞の倒置がない、すなわち、Cが存在しない証拠になると述べている。

第二に、子供の発話においては(22)で示したように *wh* 疑問文が観察されない。

- (22) a. Bow-wow go? ('Where did the bow-wow go?' Louise 15)
b. You got? ('What have you got?' Harriet 18)
c. Mummy doing? ('What is mummy doing?' Daniel 21)

(ibid.:123)

自発的な発話においてだけでなく、大人の模倣をさせた場合においても、助動詞と *wh* 句は省略されて発話されている。

- (23) adult model sentence child's imitation
Where does Daddy go? Daddy go? (Daniel 23)
Where does it go? Go? (Adam 28) (ibid.)

大人の文法においては、(24) に示したように、*wh* 句は CP 指定辞位置に移動していると考えられるので、(22)-(23) は、子供には、前置される助動詞と *wh* 句の移動先、すなわち CP および C がないと考えられる。

- (24) [CP where_j [C are_i] [IP you t_i going to t_j]]

最後に、*wh* 疑問文に関して、子供は大人が発する文頭に現れる *wh* 句を理解できなかったり、主語と誤分析する、という事実を挙げている。例えば、(25) は何を聞かれているのか理解できていない例である。

- (25) a. What did you do? --- *Head*
b. What are you doing? --- *No* (ibid.:129)

また、(26) で示したように聞き返したり、同じ語句を繰り返したりしている。

- (26) a. What have you got? --- *Eh?* (Dewi 20)
b. What are they doing with it? --- *Uhm* (Jenny 24)
c. Where is it gone? --- *Gone* (Elen 20)
d. What did mummy say? --- *Mummy* (Jenny 21)

これもまた子供が何を聞かれているのか理解できていない証拠である。さらに、(27) が示すように、答えとして主語を繰り返している事例がある。

- (27) a. What do they [=birds] want? --- *Bird* (Dewi 20)
b. What's he [=caterpillar] doing? -*Caterpillar* (Bethan 20)
(ibid.:130)

Radford によれば、子供は (27) のような疑問文を 'What's X' または 'What are they' のような連辞 (copula) の疑問文と誤って解釈しているというものである。すなわち、文頭にある *wh* 句は前置された補部ではなく、基底生成された主語であると誤分析しているというものだ。この事実は、子供の文法に C および CP が欠如しているということを示すものと述べている。

次に Radford (1990) は、2つの子供の発話の特徴を挙げ、子供の文構造には IP も欠如していると主張している。第一に、子供の発話には *to* 不定詞が見られない、というものだ。

- (28) a. Want [teddy drink] (Daniel 19)
 b. Jem want [mummy take it out] (Jem 24)
 c. Want [open door] (Daniel 20) (ibid.:140)

(28) に対応する大人の発話においては、必ず不定詞の *to* が含まれる。

- (29) Jem wants Mummy to take it out.

to 不定詞は (30) に示したように、一般的に I に生起するものであると分析されており、IP の存在を示す証拠になると言われている (cf. Chomsky (1986))。

- (30) I'm anxious for [_{IP} you [_I to][_{VP} do it]]

(28)-(29) の違いは、大人の文構造が (31a) のように IP を持つのに対し、子供の文構造は (31b) で示すように IP を持たないためであるとしている。

- (31) a. Jem wants [_{IP} Mummy_i [_I to][_{VP} t_i [_V take] it out]]
 b. Jem want [_{VP} Mummy [_V take] it out] (ibid.:141)

IP が欠如しているという主張を支持する 2 つめの証拠として、子供の定型文において時制と一致の屈折 (tense/agreement inflections) がみられないという事実を挙げている。Radford (1990:145) は、大人の文法において定型の I は [+TENSE, +AGR] をもっており、これが 4 つの形で具現されるとしている。[+TENSE] は現在形か過去形かを指定するものであり、[+AGR] は数 (単複) および人称を指定するものである。これらを具現する一つ目の方法は、法助動詞が I に基底生成されるというものである。

- (32) a. He [_I should][_{VP} be writing it]
 b. He [_I should][_{VP} have written it]

2 つ目の方法は、I の位置は基底では空であるが、助動詞 *have*, *be* が移動することによって埋められ、時制および一致を具現するものである。

- (33) a. He [_I was_i][_{VP} t_i writing it]
 b. He [_I had_i][_{VP} t_i written it]

3 つ目の方法は基底としても表層上も I は空であり、時制および一致の具現は I の補部である VP の主要部 V によって具現されるというものである。

- (34) He [_I e][_{VP} wrote it]

4 つ目の方法は、基底では空であるが、表層上ダミーの *do* ('dummy' *do*) が挿入されるというものである。

- (35) He [_I did] not [_{VP} write it]

子供の発話はこのいずれの特徴も備えていない。例えば、(36) で示すように、

屈折していない原形、動名詞 -ing、分詞 -n が現れる。

- (36) a. Heyley draw it.
b. Baby talking.
c. Him gone. (Heyley 20) (ibid.:148)

また (37) に示したように、屈折を含む質問に対しても屈折形を用いずに答えている。

- (37) adult: What does the pig say?
child: Pig say oink. (Claire 25) (ibid.:150)

(36)-(37) は全て I の特性である時制も一致も現れておらず、子供の文構造には I が存在しないことを示す更なる証拠となると述べている。(37) の構造は次のようになる。

- (38) adult: [_{IP} The pig_i [_I e][_{VP} t_i [_V says] oink]]
child: [_{VP} Pig [_V say] oink]

また否定文において、子供の発話には 'dummy' *do* が使われない。

- (39) Kathryn not go over here. (Kathryn 24) (ibid.:152)

以上の点から、Radford (1990) は子供の文構造には CP だけでなく、IP も存在しない、ということを主張している。

しかしながら、子供の文法に CP 及び IP が存在しないという分析には問題があるように思われる。次節では英語とドイツ語の事例を検証し、子供の文法にも IP, CP が存在するということを主張する。

4.2. Problems with Radford (1990)

4.2.1. English Data

Radford (1990) は IP の存在しない理由として子供の発話には時制が見られないことを挙げているが、彼自身指摘しているように、過去形を示す発話が見られる。

- (40) a. Lost it (Bethan 20)
b. Found it (Bethan 21)
c. That broke (Claire 23)
d. You got bear (Annna 24) (ibid.:163)

また、主語と動詞の一致も見られる。

- (41) a. Here it is! (Neville18)
 b. There it is! (Claire 24)
 c. Here you are (Frances 18...)
 d. There you are! (Gary 21) (ibid.:164)

(40) に関しては、大人の完了形の助動詞を省略したものだという説明をしているが、(40c) に関してはさらに、broken の語尾を落としたものであるという説明をしている。また、(41) に関しては形式的に覚えているもので IP の存在を示すものではない、と述べているが、いずれの説明もアドホックであり、IP の欠如を示す強い説明ではない。

また、*wh* 句が存在しないことを CP の欠如の理由としてあげているが、かなり早い時期から *wh* 句が子供の発話において見られる。

- (42) a. What's that? (Dewi 18)
 b. Who's that? (Hayley 20)
 c. Where's helicopter? (Stefen 17)
 d. How are you ? (Betty 18) (ibid.:131)

- (43) a. Where girl go? Where pencil go? Where cow go?
 b. What kitty doing? What squirrel doing? What lizard doing? (Claire 24) (ibid.:132)

(42) については決まり文句のようなものとして覚えているものだという説明をしているが、大人の模倣に対して、子供が体系的に異なる反応をしている場合もあり (cf. (23), (37))、この場合においてのみ決まり文句として覚えているという説明には問題があるように思われる。また、(48) については半形式的 (semiformulaic) という説明をつけており、(44) の VP 付加の構造をしていると述べている。

- (44) [_{VP} what [_{VP} kitty doing e]]

しかし、この *wh* 句が移動していることは明らかであるが、その移動の駆動要因が明らかにされていない。さらに、Radford (1990:136) はこれらの事実が、*wh* 移動を示すものであるとしても、それがすなわち C が存在する証拠にはならないと述べている。この主張は理論的に大きな問題がある。生成文法理論において、*wh* 句の移動は C にある Q 素性によって駆動されるものであって、素性の照合を必要としないものは経済性の原理から移動を駆動されない。

さらに、子供は大人の *wh* 句を含む発話を理解しないという説明もしているが、実際、下記の応答では、*wh* 句の意図することをきちんと理解している。

- (45) adult: What does the pig say?
child: Pig say oink (Claire 25) (=37)

したがって、IPおよびCPが存在しないという主張は、経験的・理論的観点から問題がある。

4.2.2. German Data

Hyam(1992)、Poeppl and Wexler (1993) は、ドイツ語の言語獲得のデータをもとに、子供は大人同様 CP および IP をすでに獲得していると主張している。

CP が存在する最も大きな根拠として、V2 現象 (V2 phenomenon) が見られることを挙げている。V2 現象とは、定形動詞を文の第二要素におき、主語、目的語、副詞などの最大投射を第一要素に置くものである。これらが成立するためには、第一要素が CP 指定辞、第二要素の動詞が C 主要部に生起していると一般的に分析されている。実際、子供の発話には (46)-(47) で示したように V2 現象が観察された。(46) は目的語が第一要素にきている例であり、(47) は副詞が第一要素にきている例である。

- (46) a. Kahehabahn fahr ich.
 (toy race car) drive I.
 b. Eine Fase hab ich.
 a vase have I (Poeppl and Wexler (1993:14))
- (47) a. Da bin ich.
 there am I
 b. So macht der.
 so makes he (ibid.)

従って、子供の節構造に CP が存在していると考えるのは妥当であろう。

さらに、Radford (1990) は IP が存在しない証拠として、主語と動詞の一致が見られないという点を挙げたが、Poeppl and Wexler (1993) では、ドイツ語には明らかに子供にも主語と動詞の一致が見られることを示した。彼らの検証した 231 の事例のうち、誤った一致を示したものは 7 つのみであっ

た。その7つの間違いは全て複数の主語であった。

また、語順の点からもIPが存在するということを主張している。観察された子供の発話において(48)のように目的語で始まる文は全て(49)の語順であった。


- (48) Den tiegt a nich wieda.
that. ACC gets he not again
'He cannot get that one again.' (ibid.:23)

- (49) Obj-V-Subj-NEG/Adv

副詞や否定語は一般的にVPの左側にあるという仮定を前提とすると、IPがない場合、主語はVP内に留まったままで(50)のようになり語順について事実と反する。

- (50) [CP Obj [C V [VP NEG/Adv [VP Subj]]]]

一方、IPが存在すると仮定すれば、(51)で示したように、主語はIPの指定辞の位置へ移動することになり、(52)の語順を正しく予測できる。

- (51) [CP Obj [C V [IP Subj [VP NEG/Adv [VP t]]]]
- 

同様のことが、副詞が文頭にくる文において言える。観察された子供の発話のうち、副詞で始まる文は31あり、そのうちの4つに否定語または別の副詞が含まれていた。その4つすべての文が、(52a)の語順を示している。

- (52) a. Adv-V-Subj-Neg/Adv
b. *Adv-V-Neg/Adv-Subj

(50)での議論と同様、この事実はIPがあることを示している。

以上の英語およびドイツ語の言語事実に基づく議論を踏まえ、本論では、子供の文構造にはIPおよびCPが存在しているという分析が正しいと主張する。

5. The Acquisition of Adverbs

2節で、共時的観点からCore FC Analysisには問題があることを指摘し、3節でPeripheral FC Analysisがより有効な分析であるということを述べた。4節の子供の節構造の議論をふまえ本節で副詞の言語獲得を考察するこ

とによって、Peripheral FC Analysis を支持する証拠としたい。

5.1 French Data

Schlyter (2005) はフランス語の副詞の L1 獲得について、興味深い観察をしている。具体的には、子供は、言語獲得の初期から全ての副詞を獲得しておらず、段階的に獲得していくというものだ。そして、その段階というのは、Cinque (1999) で提案された周延的機能範疇を含む節構造の下位の階層から獲得し、上位の階層部分に対応する副詞は後期になってからというものだ。議論を簡潔にするために、ここでは本論に関連する副詞 — 主語指向副詞、認識様態副詞、発話行為副詞 — の獲得状況について焦点をあて、子供の発達を 3 段階にわけてみてみよう。

2 歳から 2 歳 8 ヶ月までの子供 (Stage 1) の子供を調査した結果、166 の副詞の発話が観察された。そのほとんどは *la* が占めているがそれ以外に *bien* 'well', *vite* 'early' などが観察された。しかし、この段階では、主語指向副詞、認識様態副詞、発話行為副詞などは皆無であった。

2 歳 9 ヶ月から 3 歳 5 ヶ月 (Stage 2) になると、*apres* 'after', *maintenant* 'now' などの時や相を表す副詞が出現し始める。また少数ではあるが、(53) で示したように認識様態副詞を発するようになる。

- (53) a. peut-etre la?
b. ca peut-etre

Core FC Analysis の分析では、これらを認可する認可子は I であると考えられる。

3 歳 6 ヶ月から 4 歳 5 ヶ月 (Stage 3) になると、子供は認識様態副詞を頻繁に発するようになる。

- (54) a. heureusement / pronbablement il a ensuite mange du
fortunately / probably
pain (Schlyter (2005: 47))
b. peut-etre c'est bon programme (Jean 39) (ibid.:48)
perhaps

また、発話行為副詞もこの時期になって観察されるようになる。

- (55) Mimi: elle a dit qu'elle va enlever ma dent
Moth: tu vas avoir un trou pendant tres longtemps, tu sais.

Mimi: on doit (l')enlever quand-meme.

この副詞は、文の内容の評価・判断を示す評価の副詞として考えられるが、Core FC Analysis のもとでは、認可子はCと考えられてきた。まとめると(56)の表のようになる。

(56)

	発話に見られ始める副詞	認可子
Stage 1	bien, comme ca など	V
Stage 2	apres, maintenant など	I
Stage 3	pronablement / heureusement など	I, C

子供の文構造にIおよびCが存在するという前提のもとではCore FC Analysis は副詞のL1獲得についての事実を説明することはできない。というのは、大人からのインプットは主語指向副詞、認識様態副詞、発話行為副詞などの区別なくインプットされている。また、子供もそれらの副詞を認可する認可子IおよびCを持っている。それでは、なぜ子供はStage 3と同様に、Stage 1において認可子Iのもと、認識様態副詞を発することが皆無なのであろうか。またStage 2において認可子Cのもと発話行為副詞を発しないのであろうか。¹⁰ このようにL1獲得の観点からもCore FC Analysis を支持するには問題があるように思われる。

5.2. More on a Peripheral FC Analysis

Schlytier (2005) は、副詞の獲得に関してCinque (1999) が提案した機能範疇の構造的に下位の部分から上位の部分に沿って、段階的に獲得していくと述べた。また、Radford (1990) に基本的に従い、この言語獲得の事実は認可子となる機能範疇が下から上へ構築 (build-up) されていくためであると主張している。このことは、CPあるいはIP(=TP)などの機能範疇も構築に関与しているということを含意している。しかしながら、CP、IPが子供の文法に初めから存在しているということはすでに詳細に検証した。本論では基本的にSchlytierの主張に従うが、彼女がRadford (1990) に従っているという点について若干の修正を加えることにする。

すなわち、下から上へ構築されていくのは核機能範疇ではなく、周辺の機能範疇であり、子供の副詞の獲得は、認可子となる周辺の機能範疇が段階的

に活性化され利用可能になったためであると提案する。子供の文構造には、4節で論じたように、大人と同じように核機能範疇CおよびIは存在している。言い換えると、初期の文構造は、核となる機能範疇からのみ成っている。そして、(57)で示したように、成長するに従って下から上へと周辺の機能範疇主要部が発達していくと考える。¹¹

(57) Stage 1: [CP [IP [_vP]]]

Stage 2: [CP [IP [ModP [_vP]]]]

Stage 3: [MoodP [CP [ModP [IP [ModP [_vP]]]]]]¹²

Stage 1は核機能範疇C, I, *v*のみから成立している節構造である。Stage 2で下位の周辺の機能範疇主要部 Mod_{root}が活性化され、節構造が拡張される。これによって、関連する副詞が正しく認可されるようになるので、子供の言語の中で利用されるようになる。¹³ Stage 3ではさらに上位の周辺の機能範疇 Mod_{epistemic}, Moodが活性化され、子供は上位の副詞が利用可能になる。

このように、周辺の機能範疇という概念をとり入れることによって、副詞の言語獲得を説明することができる。

6. Conclusion and Theoretical Implications

本論文では、機能範疇を核と周辺という2種類に分け、これまでに提案されてきた副詞の分析について、認可子の観点から議論をおこなった。共時的言語事実からの議論に加え、副詞のL1獲得の観点からの考察を行い、Core FP AnalysisよりPeripheral FP Analysisのほうがより妥当であると主張した。

今後詳細に検証し論じなければならない問題点をいくつか残してはいるが、ここでの議論の方向性が正しいとすれば、本論の提案は副詞の認可という具体的事例の分析に加え、ミニマリストプログラムの研究に対して、次の二つの理論的貢献をもつことになる。一つは、ここでの提案は、節構造はChomsky (2001)で言われている核機能範疇では不十分であることを間接的に示唆しており、Cinque (1999)の意味に基づいた機能範疇主要部を仮定することが妥当なのではないかということを含意している。二つ目として、子供の言語獲得の観点から大人と子供の違いは核の部分ではなく、周辺の部分であるというものである。

注

- ¹ 文末にきた場合でも、カンマで区切られていれば容認可能となる。
(i) George will have read the book, probably.
- ² 機能範疇 I は Pollock (1989) 以降、T, Agr に分離された。さらに Chomsky (1995) で Agr が排除され、T へと還元された。本論では議論に直接影響を及ぼさないため、I 及び T の区別について詳細なこれ以上の議論はせず、同様に扱うこととする。
- ³ 付加分析の問題についての更なる言及は Cinque (2004) を参照のこと。
- ⁴ Cinque (1999) では、認可子として 30 の機能範疇を提案した。提案された全ての機能範疇を節の構成要素として取り入れるかどうかは議論の余地があり、本論では関連する機能範疇主要部のみ扱うことにする。
- ⁵ 副詞の認可における素性については、今後の研究課題としたい。
- ⁶ Radford (1990:20) では子供の文法的発達を以下の 4 つの段階に分けている。
(i) 0-12 months: prelinguistic stage
(ii) 12-18 months: single-word stage
(iii) 18-24 months: early multi-word stage
(iv) 24-30 months: later multi-word stage
Radford の扱う子供とは (i)-(iii) の段階の子供を指す。
- ⁷ 数字は生後何ヶ月の子供かを示している。(24=生後24ヶ月)
- ⁸ 4.1節のほかの子供の発話における言語事実についてどのように説明するのか指摘する人がいるかもしれない。本論では IP, CP は存在し、それらが活性化され利用されているか否かで、一見したところ顕在的に異なる文法性の差がでてくると考える。例えば、CP が活性化されている場合は(42)-(43)のように *wh* 句が顕在的に現れ、活性化されていない場合は(22)のように *wh* 句が現れない。
- ⁹ 197文のうち、19文が目的語が文頭にきており、副詞を伴う31の例文のうち、14の文で副詞が第一要素にきている。
- ¹⁰ Sclyster (2005) は、L2 獲得においては、初期の段階から認識様態副詞の発話がみられていることを示した。この言語事実はL2獲得者においては大人と同様の節構造をもっている証拠であると論じている。
- ¹¹ 議論を簡潔にするため、Mood および Mod 以外の周辺の機能範疇は省略している。
- ¹² *wh* 疑問文において、(i) で示したように発話行為副詞が *wh* 句の前に生起することができる。これは、MoodP が CP より上位の階層にあることを示す。
(i) Frankly, when will you leave? (Schreiber (1972:331))
(ii) [_{Mood} Frankly [_{CP} when [_C will [_{TP} you leave]]]]
- ¹³ Stage 2 において、Schlytier (2005:60) は *maintenant* などの副詞の認可子が Mod_{root} であるという可能性を示唆している。

参考文献

- Alexiadou, Artemis (1997) *Adverb placement: A case study in antisymmetric syntax*, John Benjamins, Amsterdam.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1995) *The minimalist program*, MIT Press, Cambridge MA.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by phase," *Ken Hale: A life in language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and functional heads: A cross-linguistic perspective*, Oxford University Press, Oxford.
- Cinque, Guglielma (2004) "Issues in adverbial syntax," *Lingua* 114, 683-710.
- Costa, Joao (2004) "A multifactorial approach to adverb placement: assumptions, facts, and problems," *Lingua* 114, 711-753.
- Hyam, Nina (1992) "The genesis of clause structure," *The acquisition of verb placement: Functional categories and V2 phenomenon in language acquisition*, ed. by Jurgen M. Meisel, 371-400, Kluwer, Dordrecht.
- Poeppl, David and Kenneth Wexler (1993) "The full competence hypothesis of clause structure in early German," *Lingua* 69, 1-33.
- Pollock, Jean-Yves (1989) "Verb movement, Universal Grammar and the structure of IP," *Linguistic Inquiry* 20, 365-424.
- Radford, Andrew (1990) *Syntactic theory and the acquisition of English syntax: The nature of early child grammars of English*, Basil Blackwell, Oxford.
- Schreiber, P.A. (1972) "Style disjuncts and the performative analysis," *Linguistic Inquiry* 3, 321-347.
- Schlyter, Suzanne (2005) "Adverb and functional categories in L1 and L2 acquisition of French," *Focus on French as a foreign language*, ed. by Jean-Marc Dewaele, 36-62, Multilingual Matters.
- Svenonius, Peter (2002) "Subject positions and the placement of adverbials," *Subject, expletives, and EPP*, ed. by Peter Svenonius, 201-242, Oxford University Press, New York.
- Travis, Lisa (1988) "The syntax of adverbs," *McGill working papers in linguistics: Special issue on comparative Germanic syntax*, 280-310.